

令和7年3月28日

軽井沢町議会
議長 遠山 隆雄 様

学びの多様化地方議員連盟 視察報告書

軽井沢町議会議員 小山 裕嗣

日程：

令和7年1月22日（水）10時～13時

場所：川崎市子ども夢パーク

内容：

- ・「川崎市子ども夢パーク」総合アドバイザー（前所長）、「フリースペースえん」代表西野博之氏によるレクチャー
- ・川崎市子ども夢パーク内視察
- ・「多様な学びプロジェクト」代表 生駒知里氏によるセッション

◆西野博之氏によるレクチャーメモ：

西野さん 40年前から子どもの居場所を作ってきた

夢パのじかん（全編好評公開中）

NHK「ドキュメント 72時間」

視察は1年間で212件、台湾、ドイツからも視察にきている

不登校が約35万人

学校のアンケートなので、0.3%いじめとしか言われない

いじめがどの年齢が多いか？

- ・小学2年生（1位）
- ・小学3年生（2位）
- ・小学1年生（3位）

小学校低学年の児童がとてもストレスを抱えている

不登校はこれから益々増える

認知件数 73 万 2568 万人

中学生の 5 倍 重大事態 (1306 件)

子どもの自死は増え続けている

10~39 歳、死因の第一位

小中高生 514 人 (2022 年度) 513 人 (2 年連続 500 人越え) 学校に行けないだけで自殺している現状。自殺対策という意味合いでも施策を進める必要がある

子どもを取り巻く環境

格差の拡大と二極化

「貧困 (ネグレクト) と「過干渉」

ストレスを溜める子どもたち

自分をばか、だめ、と訴える

日本の子どもは、「自己肯定感が低い」

子どもの「自信」を奪う大人の「不安」「正しい観」に見られたい

北海道安平町は、幼稚園教諭が、半年間小学校で補助教員として伴走している (小 1 ギャップ解消)

「正しさ」「完璧」を求めすぎる家庭

⇒ちゃんと、ふつう

「川崎市子どもの権利条例」

これが出来たから、子ども夢パークができた

権利というものをしっかり根っこに据える必要性あり

学びを多様化するというのは、様々な生き方を模索すること

学びの多様化学校は、子どもの声を聞くこと

アンケートとヒアリングを委託

社会教育施設に不登校対策の場所を作った

(全国で最も新しいこと)

プレイパークと併設した不登校対策

学校教育一辺倒になるから苦しくなる

学校教育一択しかかないのか

子ども家庭庁を作って、どう学びの多様化を具現化するか

生涯学習課（社会教育）が管轄

「学校教育にこだわらない生活からの学び」

学校教育指導部課長かが明言

プレイパークを提案

子どもたちがガス抜きできる場所

プレイパーク（遊び場）エリア

どこから来ようが自由

フリースペースも他自治体からも受け入れている

- ・全天候型スポーツ広場
- ・学習交流スペース「ゴロリ」飲食、ゲーム、ライブスタジオ
- ・音楽スタジオ
- ・乳幼児親子の部屋

子どもが来やすくなる場所を作る必要性がある

学びの多様化のもう一つの隠れテーマ（防災）

子どもがどうやって火を使うのか、火おこし経験している

帰宅困難者（一時避難所）

自己効力感、自己有用感を育む

「子どもの時間」が削られている

やりたいことを思い切りやる

安心してして失敗できる環境作り

学びの多様化一丁目一番地は、大人の不安を解消する

「学校に行かない子どもが見ている世界」

夢パーク（1,800万予算でスタート）

6名で対応していた。当時は50名

現状は、2,700～2,800万くらいの予算

（3,000万くらいの予算規模で考えておいた方がいい）

146万人（引きこもりの人数）

15歳過ぎても、子どもたちが行ける場所を作る

障害の有無に関わらず、通える施設

無料であるということが大切

昼食づくりを一緒にできる空間作り（毎日 40 食）

孤食から共食へ、つながりを取り戻す

指導中心になると子どもたちは来ない（支援臭がするところから、若者は来ない）

学校外の多様な学び場づくり

（演奏、芝居、歌、ダンス、アート、コミュニケーション、科学実験など多数）

学力、学歴って何か？

出会いをものにする力

「知りたい」「わかりたい」「やってみたい」

子どもは集中する。ゆめパの時間で表われている

高校の入試制度が課題

託児機能、ご飯が食べられる場であるかどうか

◆生駒知里さん（NPO 法人 多様な学びプロジェクト代表）

「街のとまり木」事業 検索サイト & モデル事業

在宅で過ごしている子が 9 割近く

平日昼間に行ける場所があったら行きたいか？ 75%

外出できない背景には、心理的壁がある

（外の人の目がある）

教育支援センター設置率 6 割

全国の「とまり木」をウェブサイトがある

不登校に関する地域の相談窓口（情報を伝える大切さ）

広域体制の整備

対話できる場、コーディネーターの必要性

まだまだ教育支援センターは学校に復学することを前提としているところは多い

調整者とは、地域ネットワークリーダーがポジティブに取り組んでいる

有識者、学識経験者がいる

議員たちも調整者としての役割を発揮すべき

こども家庭庁 助成金 不登校支援

第三の居場所支援はこども家庭庁管轄

考察：

学びの多様化地方議員連盟の視察で、川崎市子ども夢パークへ。とても濃密な半日だった。NPO 法人フリースペースたまりば理事長の西野博之さん、多様な学びプロジェクト代表理事の生駒さんの講演は、ありとあらゆる点において、示唆に富んでいたし、当町が学びの多様化学校「軽井沢オープンドアスクール（仮称）」を開設する上でも抑えるべき大切な点がいくつかあった。

- ・一人ひとりの背景やニーズに合わせた多様な学びと育ちを保障する環境づくり
- ・「なにもしない」ことの保障。支援のための「目標などはなく、居たいように居られる場」
- ・指導や「支援臭」から若者は遠ざかっていく
- ・不登校児童生徒を、「学校嫌いな子」と決めつけないでほしい

生駒さんが取り組まれている「街のとまり木」は、全国の居場所検索サイトとなっており、500 団体以上掲載されている。とまり木オンラインには、定期的な講座開催、サロン交流、アーカイヴ動画数が約 100 本発信されているのでご参考まで。

<https://tomarigi.online>

その後、奇しくも軽井沢オープンドアスクール設立準備委員会の委員に、西野博之さんが就任してくださった。今後委員の考察、助言等に大きく期待するところである。